



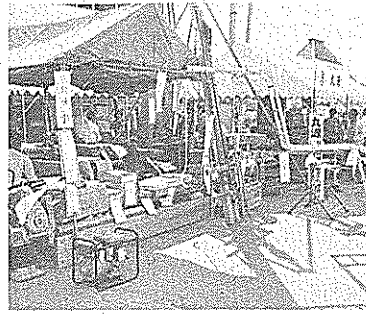
民話と伝説

お産土坊主の話

大浦の吾岡山の東の、山輪部落は、今は人家が建ち並んでにぎやかになっているが、昔は一軒の人家もなく、一面の桑畑で、それは寂しいところであったという。

ここには血なまぐさい悲しい物語が残っている。この部落の片すみに、京の郡台というところがあり、その一部に処刑場の土壇場があった。今でも、お産土坊主の墓という、小さい祠が残っている。

「マイホーム」造り」などで、建築祭



「皆様方のマイホーム造りにすぐ役立つあらゆる品目を展示し、建設に関する無料相談コーナーも特設してお待ちしております。」と呼びかけて、第五回香美・南国建築祭が十月八日から十日まで開催された。

会場の南国ホテル跡地（明見）には、百数十社、二種類の建築住宅用品が展示され、地元の大工さん、建築士さん、有志のグル

今から五十年も昔のことである。高知の城下に福岡某という家老があった。家老といえはかならず茶坊主の二、三人はかかえていた。

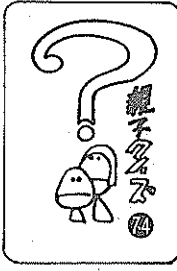
福岡家に二十歳ぐらいの女徳という茶坊主があつた。安芸郡の川北の出で、性格はよく美男子であつた。一方福岡家にも十七、八歳の年頃の娘があり、絶世の美人で、なかなかの評判であつた。恋に上下のへだてはなく、いつしか二人は、人知れず愛をささやくようになった。母親は二人を呼び出し、

「夜の明けぬうちに、女徳の故郷川北へ逃げなさい。」とたつぷり路銀をわたして家を出した。二人は手に手をとって、やっとの思いで吾岡山の北まで来たが、夜は白々と明けはじめた。そこで、今の大森の共同墓地のところの某郷士に助を求めたが、「少々都合がある。」と行って後免の郷士を紹介した。この郷士の家敷は東町、今の電車通りの北側にあり、明治の末期まで杉の大木が繁り、大家を物語るような屋敷跡が残っていた。

その郷士は二人を土蔵にかくまひ、すかさず福岡家に知らせた。語も涙、娘は福岡家に引きとられた女徳は討ち首になった。今の大森の農協付近に地蔵んぼ

という四つ辻があつたが、昔はよく芝天の出る寂しいところであつた。そこから少し東へ行つたところにお地蔵さんがあり、杉の老木が繁つていた。悲業の死をとげたお産土坊主の魂は、このうらみを、はらさんものごと、毎夜火玉となつて墓を出て、この杉の大木まで飛んで行つた。それで郷士の家の者はうす気味悪くなり、とうとう山田に移つたが、火玉はどこまでもおわえていくのであつた。

後免の屋敷跡がなくなるまでは、子供がいたずらをしておると、親から火玉が飛んでくるとよくおどかされたものです。



ご家庭で話し合つて答えてください。答えは今月号の広報に出ています。

●もんだい・第十回市民賞に島田房一さん五人が決まり、〇〇の日に表彰式が行われます。

●しめきり・十一月十五日(火)おくり先・〒783 南国市大浦 南国市役所内広報委員会親子クイズ係 (答えのハガキには必ずお歳・職業を書いてください)。

●しようひん・特賞千円〇三人 残念賞(記念品) 〇十人

第七十三回正解者発表

●こたえ ①のでした。

●特賞・千円〇三人

●高島都代さん(大浦)

●高橋佐知さん(植野)

●残念賞・記念品〇十人

●森本恭弘(植野) 筒野美代(立田)

●島田一雄(田村) 浜田高年(立田)

●筒井竜一(植野) 竹村貞夫(久礼)

●島井麻里(左石山) 前田朱美(藤原) 高島寛(大浦) 松岡春菜(植野)

おめでとございしました。

市業たばこ品評会開かれる

南国市業たばこ品評会が、さる九月二十七日、長岡農協会議室で開かれました。

これは、葉たばこの品質向上を、市業たばこ推進協議会(吉川運雄会長、市産業経済課など)によって毎年開かれているもので、市内各地の栽培農家から五十点あまりが出品されました。

今年は四月の強風の被害のため、出品は例年にくらべるとやや低調だったものの、集まった農家

の人たちは、審査にあつた島尾専売公社技術課長の説明に熱心に聞き入るなど、より良質の葉たばこ栽培に意欲をみせていました。

審査結果は次のとおりです。

▽優等 吉川俊水(上干枝)▽一等 徳橋静(久礼)▽二等 吉川運雄(上干枝) 山崎昌身(上末松)▽三等 西山登(片山) 西村和子(笠の川) 田瀬秀馬(笠の川) 浜田健一郎(笠の川)



運動会の日にはダンスは出来なかつたけれど皆んなの踊りに合せて一生懸命うたつたものだ。

「十五でねえやは嫁に行き、おさこの使ひもたえはてた……」

赤トンボのうたを聞いたたびに、運動会のシーズンになるとびにその時の事をなつかしく思い出す。彼女たちもきっと同じ思いでいるにちがいない。私の息子はもう中一と中三、当時の私の年齢はとくに過ぎていくけれど、級友の声援に促されるかの様に力一杯トラックを走つていく。

古谷 紀代 (立田)

元親の古井を過ぎて小高きに上れば既床は霞みて見ゆる

園豊町 橋田井波

オホソク短かき夏の海かなし 青く冷たくうねり来れる

植野 中司愛子

同窓の友等集いて青き日は 夢はろばると刻の今更

前浜 沢田千恵子

南国歌壇

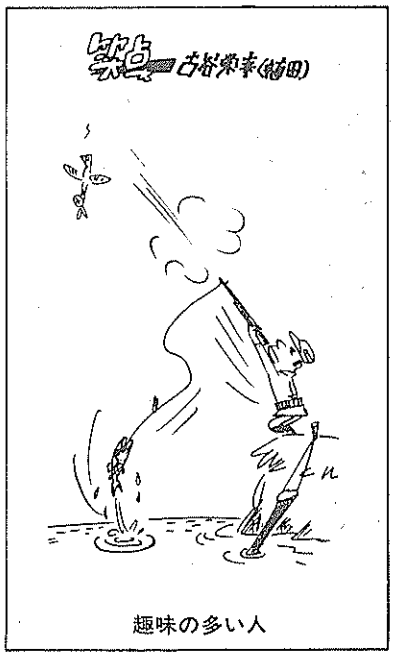
殉教の千人首塚今日も見て 炎大くらくく大草の旅

ペダル踏む道に木扉の香の流れ 秋幾たびいで治療に通ふ

われになき豊かな知性せまりくる 君とむかいて語るひととき

大浦 上東佐吉

岡豊町 岡崎冬身子



趣味の多い人

つくし



赤。白。かわい。い。声援を受。けながら元。気一杯に走。つている子。供の姿、例年の如く運動会シーズンの到来である。子供もさる事ながら親も身をのり出している。応援ぶりはほほえましい風景だ。いつもこの頃になると私は三十年余り前の小学校時代の運動会の事がなつかしく思い出される。あれは終戦の翌年であつた。私たちが四年生のダンスは「赤トンボ」を踊る事になった。放課後薄暗くなるまで毎日毎日練習した。「夕やけこやけの赤トン

ボ、おわれて見たのはいつの日か……」当時は今のように放送設備も充分でなく、貴重な一枚のレコードを何度も何度もかけて練習した。おかげでダンスの方は皆そろつて上手に出来る様になったが、さて運動会ももう間近という時になつて、レコードがシャシャと雑音がひどく、聞けたものではない。先生方もよほど困られたであらう。私たちが三人を呼ばれて、当日は先生がピアノを弾くからあなただち三人が赤トンボのうたをうたつてちょうだい、といわれて

運動会の日にはダンスは出来なかつたけれど皆んなの踊りに合せて一生懸命うたつたものだ。

「十五でねえやは嫁に行き、おさこの使ひもたえはてた……」

赤トンボのうたを聞いたたびに、運動会のシーズンになるとびにその時の事をなつかしく思い出す。彼女たちもきっと同じ思いでいるにちがいない。私の息子はもう中一と中三、当時の私の年齢はとくに過ぎていくけれど、級友の声援に促されるかの様に力一杯トラックを走つていく。

古谷 紀代 (立田)

夕空となり飛びふえし蜻蛉かな 張り籠もよき新穀を鞠う幸

夜学子の座の空いていし夕餉かな 台風をいなす綱をさきばきけり

陳らせて土用鰻をさきばきけり 踊子は中学生とアナウンス

市場で逢う知床人ささきやきて 浅窓の筒の明光星を恋う

秋風運石には石のうらおもて

南国俳壇

林 光江 (梵鐘会)

吉川 節 ()

竹内紀子 ()

森田きみ (波俳句会)

浜田東風 ()

松本巨郎 ()

西本かよ子 (岩村句会)

島崎洗一 ()

吉田常光 ()

南国俳壇

林 光江 (梵鐘会)

吉川 節 ()

竹内紀子 ()

森田きみ (波俳句会)

浜田東風 ()

松本巨郎 ()

西本かよ子 (岩村句会)

島崎洗一 ()

吉田常光 ()



「皆様方のマイホーム造りにすぐ役立つあらゆる品目を展示し、建設に関する無料相談コーナーも特設してお待ちしております。」と呼びかけて、第五回香美・南国建築祭が十月八日から十日まで開催された。

会場の南国ホテル跡地（明見）には、百数十社、二種類の建築住宅用品が展示され、地元の大工さん、建築士さん、有志のグル

「夜の明けぬうちに、女徳の故郷川北へ逃げなさい。」とたつぷり路銀をわたして家を出した。二人は手に手をとって、やっとの思いで吾岡山の北まで来たが、夜は白々と明けはじめた。そこで、今の大森の共同墓地のところの某郷士に助を求めたが、「少々都合がある。」と行って後免の郷士を紹介した。この郷士の家敷は東町、今の電車通りの北側にあり、明治の末期まで杉の大木が繁り、大家を物語るような屋敷跡が残っていた。

その郷士は二人を土蔵にかくまひ、すかさず福岡家に知らせた。語も涙、娘は福岡家に引きとられた女徳は討ち首になった。今の大森の農協付近に地蔵んぼ

成、十月二十七日から使用を始め、十月二十九日から使用し始めており、郵便局などの利用者には喜ばれています。

なお、南国郵便局でも同じ図案のものを十月九日から使用して人気を呼んでいます。

人気を呼んでる スタンプ

南国郵便局では、特別天然記念物長尾鶏 記賞のゆかりの国衛跡頭形碑 特産のやまももを配した「風景入通信日付印」を新たに作